# 豆同盟

聖マリア女学院高校　3年　太田　桃加

夕時の空き地の草むらに、3つの小さな頭が、もそもそと動いている。

「……で、今度の豆同盟のミッションだけどさ」3つの頭のうちの、一つが他の2つに話しかける。

「この前みたいに、げんこつとお説教をされるようなことはしたくないよ」

「同感。サブローの言うとおりだ」

「サブローも、ジローも怖がりだなぁ。それじゃあ、豆同盟の名が廃るぜ！」今回のミッションに怖気づく2人を、イチローは強くたしなめるのだった。

「豆同盟」とは、この草むらで、もそもそしている3つの頭、イチロー、ジロー、サブローの三人組を指す。彼らの共通点はとにかく「チビ」であることだ。以前、近所のおじいさんが仲良く遊んでいる三人組に『チビさん三人集まっても、チビはチビだな』という言葉を投げかけた。もちろんおじいさんに悪気はない。しかし、それがイチローの癪に障ったらしい。その場で、おじいさんに噛みつこうとしたのを、他の2人は必死で止めるということがあった。それから、イチローを中心として、「体はチビでも心は錦、チビの地位向上に励む同盟＝豆同盟」が発足された。もちろん所属メンバーは、イチロー、ジロー、サブローの三人組のみだ。

「たしかに、この前のげんこつは、さすがの俺でも痛かった」

「そうとも、そうとも」サブローは、この前のげんこつを思い出したかのように、苦い顔でイチローに調子を合わせた。

「僕さ、思うんだけど…」今まで、イチローとサブローのやり取りを眺めていたジローが話を切り出した。

「僕たちのミッションって、幼すぎないか？この前は、はなまる精肉店のコロッケを、全部、亀の子たわしに入れ替えただけじゃないか？そんな事してるから、いつまでも馬鹿にされるんだよ。それに僕も、げんこつはもう十分だし」ジローの言葉は図星だった。さすがのイチローも反論できない。サブローは、同意を示すように小さな頭でうなずいた。

「だから、今度のミッションは、幼くない『おとな』なものにしよう！」

「それもそうだな…。でも、『おとな』なミッションってなんだ？」

3人は小さな頭で知恵をふり絞った。遠くでは、5時を告げる「夕焼け小焼け」のメロディーがさみしく鳴っている。

「コーヒー…」突然、サブローが蚊の鳴くような声をだした。イチローとジローは、その声の主をじいっと見つめた。

「いや…、だからさ…、コーヒーはどう？」

勇気を振り絞ってだした声は、夕焼け雲に吸い込まれていくようだった。

「コーヒー？また、どうして？」ジローは優しく問いただした。

「お母さんが言ってたんだ『コーヒーは大人の飲み物よ』って」

「確かに、コーヒーを飲んでるのって、大人ばかりだな」

「コーヒーが大人の飲み物なのはわかったよ！で、ミッションの内容はどうするんだ」

「イチロー、そう怒るなって。サブローにも案があるんだろ？」ジローは、いつもよりもすっかり小さくなってしまったサブローを、

もう一度見つめた。

「……。商店街にある、喫茶まりあで三人でコーヒーを飲む、とか―」自信なさげな言葉は、語尾を濁したまま消えた。

「……いいじゃん」今までご立腹だったイチローの口がニヤリと笑った。

「うん！僕もいいと思う！」

「ほっ、ほんとに！？」今まで自信を無くしていたのがウソのように、サブローは満面の笑みで声を上げた。

かくして、3日後、豆同盟の「喫茶まりあでコーヒーを飲もう」ミッションがスタートした。

「いいか？喫茶まりあのマスターが出てきたら、みんなで言うんだからな」

「オーケイ！」

「ねぇね、一応、練習しとかない？」

「しょうがねぇな、サブローは。せーの」

「「コーヒーください！」」

そしていよいよ、その時が来た。三人組は今にも破裂しそうなくらい脈打つ小さな心臓を抑え、喫茶まりあの前に立っていた。

（マスターが来た！準備はいいか？）

イチローの声と同時に、喫茶マリアのドアが開き、カウベルがからんころんと音をたてた。

「「コーヒーください！」」

おもしろいこともあるものだ、とマスターは思った。いつものように開店の準備をしようと、ドアノブを回し、店の外にでると、いたずら好きで有名な「豆柴三匹」がコーヒーを下さいとばかりに尻尾をふって、おすわりしていたのだから。